

## 一般質問

大谷専修学院の会計をはじめ、3会計が特別会計から一般会計への統合が提案されました。「本来の特別会計設置の理念とは相反する」との説明ですが、「理念とは相反する」具合的内容と、一般会計化することの意味を改めてお聞かせください。

特に大谷専修学院は、人の育成と教師養成を担う大変重要な教育機関です。縮小する財政、また入学者数が定員に満たない課題を抱える中、学院も効率化や経費・人員削減の対象になるのでしょうか。教育機関は教団のいのちです。適切な教育環境、職員配置は担保されるのでしょうか。ご所見をお聞かせください。

次に現如上人の足跡をとおし、近代史の検証についてお尋ねいたします。

宗会は戦後50年の1995年に全世界に向け「不戦決議」を、20年後の2015年には重ねて「非戦決議2015年」を採択し、宗門の犯した罪の懺悔と罪責の検証を表明しました。

教団と国家の関係は幕末明治期以降大きく変化しました。

2022年は現如上人百回忌をお迎えします。上人の生きられた時代は、幕末から明治の激動する時代。天皇制をたてる明治新政府、廃仏毀釈の中、資金のない明治新政府の北門警備を担った、東本願寺の北海道開拓事業参画は、現如上人の足跡で最も注目されます。

開拓事業は明治政府の要請をうけて願い出る形で、東本願寺は「移民奨励・新道切開・教化普及」をスローガンに積極的に事業に協力しました。宗門存続の危機を国策に協力することで乗り越えてきたともいえましょう。寒冷地での開拓のご苦労は如何ほどだったのでしょうか。

しかし、この北海道開拓事業は、先住アイヌ民族への迫害搾取を引き起こすことになりました。

国策に協調する教団の在り方は、ハンセン病（隔離）、戦争加担、仏法の名の下で断絶、差別、惨禍をもたらしてきました。

長年課題にしてきた「見真」諡号額の問題もあります。

「亡き人を偲びつつ如来のみ教えにあいたてまつる」とは昭和法要式の表白文です。

「亡き人を偲ぶ」現如上人、そして現如上人が生きた時代を検証することが法要をお勤めする大きな意義であると思います。ご所見をお聞かせください。

本山所蔵の資料もたくさんあると思いますので、本山としての検証作業と、パネル展等での公開を切望しますが、お考えをお聞かせください。

行財政改革案についてお尋ねいたします。

「持続可能な基盤整備」の手立てとして行財政改革案が示されました。

言うまでなく大谷派教団は仏教教団です。その教団運営は仏教精神に依らなければならぬと思いますが、当局は如何お考えですか。

この度の改革案も仏教精神による改革と思うのですが、私にはよくわかりません。この度の改革案の中で仏教精神は表現されているのでしょうか。お聞かせください。

そして「新たな宗派財源の確保」として保管資金の「運用」を考えておられますが、仏教教団の資産管理として、金融マーケットでの「運用」は如何なものでしょうか。仏教教団は懇志、布施で成り立っています。仏法、教団に対する尊敬・敬意、言葉を換えれば供養で成り立っています。

懇志を大切に使うとは、運用ではなく教法の宣布です。教法の宣布のために懇志を運用し財源としたいというのは、全くの詭弁としか言いようがありません。金融マーケットでの運用を見込んで懇志や経常費のご依頼をするのですか。仏法に懇念を運ぶ全て人への背信となるでしょう。

運用ではなく供養を受ける教団になるよう、言い方をかえれば、教団の活動に投資されるような教団が、教団たる所以ではないでしょうか。

ともかく拙速な改革に走るのではなく、広く論議を公開し、仏教精神にかなう行財政改革を切望して質問を終わります。